

エコたま グリーンNEWS



多摩市民環境会議機関紙 第 132 号(通巻第 192 号) 2014 年 8 月 28 日発行 発行人: 清水武志朗
編集人: 井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9
東永山複合施設 301(事務局員は常駐していません)
e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL <http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp>

i-café もっと熱く! 聖蹟桜ヶ丘



多摩 N P O センターでは、毎年、数回「i-café(あいかふえ)」を開いている。交流イベントだが、ヴィータ7階で開かれた8月23日

のそれは、「聖蹟桜ヶ丘」をテーマに市民活動の熱い心意気を持った3人のプレゼンターが、それぞれの活動を語るものだった。そのなかのひとり、平清太郎さんは桜ヶ丘商店会連合会の会長にしてせいせき桜まつり実行委員会の委員長でもある。つまり、聖蹟桜ヶ丘がにぎやかな町になるか、そうならないかはこの人の考え方いかんにかかっているような人。さっそく、平さんの話を聞くことにしよう。

聖蹟桜ヶ丘には7つの商店会があったが、現在は5つになり、全店舗数はせいせきショッピングセンターと O P A を入れて 330 店舗。パチンコやさんといえば、最近では医療機関のドクターにも入ってもらった。商店会連合会の会長を引き受けた以上は精いっぱいやろうと、自分自身でモチベーションを高めながらやっている。

こんなにすばらしい町なのに、昨年から今年にかけて53年も店を続けてきたさくら通りの金物屋さん、川崎街道沿いの時計屋さんが廃業した。経営者の高齢化もあるが、後継ぎがいてもそういう業種では利益が出せない、つまり食べていけないとの問題が2店に共通していた。出店しても商売がうまくいなくて、商店会に入会しても脱会することが繰り返されている。

若い人たちが聖蹟をもっと元気にしたいということで「リレー・マラソン」から始まって、「クラフトビール・フェア」につながっている。商店会が疲弊するなかで、そういった若い力の台頭は商店会にとっても大歓迎。町をもっと元気にしていかなければと心から思っている。

地域コミュニティを図るために、商店会の人たちは一生懸命やってきた。商店会は地域と共生し、地域によって生かされていることをみな知っている。こういう厳しい経済状況にあるが、地域コミュニティ建設に貢献していきたいという気持ちはみな持っている。

桜ヶ丘は多摩センターに比べると、企業が非常に少ない。とはいえ、京王電鉄



平清太郎さん

さんや保険会社などないわけではない。株式会社で保育事業を行っているところもある。これらが連携しながらつながっていかない限り、この町は



桜まつりの会場で浪江麵に行列元気にならないとの結論を持っている。

多摩の町も東日本大震災から学んで、首都圏直下型地震に備え、日ごろからいろいろな取り組みをしていかななくてはならないが、今年28日には多摩消防署と市の防災安全課の職員から研修を受けるような予定だ。

「せいせき桜まつり」については、すでに33年の歴史があって、だいぶ地域に根づいていると思う。第31回から社会的テーマで「がんばっぺ東北」を始めた。福島県浪江町の浪江焼き麵の八島大王にも来てもらった。NHKニュースで昼、夕、夜と流してくれたほどだった。

新しい試みとして、和田に「日本アニメーション」のスタジオがあって、40年を迎えるそうだ。社長がお嬢さんに代わられたことから、多摩商工会議所を通じて「桜ヶ丘の地域コミュニティのためになるなら」と、作品のキャラクターを提供してくれることになった。今後、「ラスカル」を使ったいろいろな仕掛けを行っていくので、みなさんの目にも止まると思う。

今回の消費税の値上げで全国の小さな商店会は壊滅状態になっている。それで国も補正予算を組んでくれ「一商店会に400万円、5つの商店会にまとまれば800万円」の補助金を出してくれることになった。こちらは5つの商店会連合だから800万円と思ったが、せいせき S C や O P A のような大きなところは対象外ということで400万円になってしまった。

でも、それを有効に使って町の活性化につなげていきたい。「聖蹟桜ヶ丘活性化連絡会議」というものを立ち上げるつもりだ。聖蹟周辺にいるいろんな分野の人が同じ思いであることを確認している。O P A の支配人やせいせき S C の部長と3者会談を行ったり、商工会議所の専務理事とそういう話をし、行政の指導もいただきながら、こういった活動を加速させることが、きょうの主催者側の目的にも近づけることじゃないかなと思っている。

ESDの10年・地球市民会議に市長、中学生が参加

多摩市では市立の全小中学校が E S D (持続発展教育) のユネスコスクールとなっているが、その E S D が 10 年を経過したのを記念して上記会議が開かれ、当市からも関係者が出席し、意見を述べた。文部科学省、日本ユネスコ国内委員会の主催で8月21日、22日の二日間、渋谷区青山の国連大学で開かれた。

21日の「E S D ステークホルダー円卓会議」の自治体セッションには阿部裕行市長が、他の4自治体代表と討論。そして22日の「次世代からの E S D 体験報告」には多摩永山中学校と東愛宕中学校の生徒たちが「世界の人々と仲良くするために、私



自治体セッションで語る阿部市長たちは何ができるのか」との問題提起で、両中学の8人が自分たちの考えを発表した。

多摩からエネルギーと幸せについて考える(下)



全国で地域の金融機関が再生エネを増やそうという動きもある。金融機関の役割としては、再生エネに融資を行う。ファンドをつかって行う場合もあるし、投資案件として経

講師の河口真理子さん 営に参画する可能性もある。今回の多摩電力(たまでん)にはT信用金庫がついているということだが、再生エネというのは地域の資源を使うので、地域の金融機関と組んでやっていくのはいいことだ。

金融機関に求められる能力としては、事業が採算に合うか、市民だけでやっていると甘くなってしまうので、目利きの目ときちんと事業の中身をチェックすることが大事だ。地域に眠っている資源を掘り起こして、環境活動に資することが地域金融機関に求められている。投資ファンドの出資者にそういうところを紹介する。

小田原市では原発事故後、みんな放射能が怖くて外に出なくなってしまったため、中小企業が商売に困るようになった。そこで、再生エネを知る鈴廣(かまぼこ)の



経営者が、地域の中小企業と金融機関を母体として再生エネ事業を進めていこうと立ち上がった。山口のほうでは元会社員が中心になって、地域

小田原・鈴廣の鈴木副社長 のエネをつくるなど様々なタイプの事業が生まれてきている。

地域のおカネは地域の活性化に使われる。自分たちのところで回るおカネになる。そのままエネルギー・コストとして外に出ていかない。発電したいと思っても簡単にできることではないし、状況によっては自分の家に太陽光パネルを張れる人もいるが、マンションなどでできない人もいる。そういう人は発電事業におカネで参画するという機会もある。

よく考えてみると、わたしたちは自然からエネルギーを得てきている。太陽にしても風や水にしても。時代ごとに得たいろいろな技術をもとにして、よりレベルの高い自然エネでエネルギーを得る社会になろうとしている。生活者のエネということになると、いろいろな利点をひっくるめて日本の社会の強靱化につながる。

再生エネを考えるときに重要なのは、地域ごとの特性があるということ。日本全国でいろいろな特産品がつくられているわけだが、その土地の特性によって気候や風、土などによって特産品が生まれているように、エネルギーも地域の気候や地形に依存している。秋田なら風力、長野県飯田市の日照時間の長いところでは太陽光など、自分たちの特長をうまく利用して選んでいく。

いま、化石燃料の限界、ピークオイルというものが見

木質系バイオマスへの原料の供給 えてきた。そして原子力の問題も露呈されている。もとからあった地域の自然エネをもう1回見直すべき。化石燃料と原子力



にこれ以上、頼ることができないというなかで、地域の自然エネを見直すことが大事だ。

自然エネはバイオマス以外、1回設備をつくってしまおうとその後、燃料代がかからない。化石燃料は買わねばならないので必ず燃料代がいるが、太陽光や風力はメンテナンスは必要なものの、継続時に非常に大きなエネルギーコストというものがかからない。

そこが大きなメリットで50年や100年は使える。とくに小水力なんて100年前に使っていたものがいま復活しているの、長期的にはおカネのかからない非常に安いエネルギーといえよう。

ご当地エネだが、2001年に北海道のグリーンファンドという風力が最初にできた。3.11以降、採算性がよく見えるようになった。だから歴史としてはもう13~14年になる。先ほどの小田原のほうとくエネルギー、多摩のたまでん、静岡市など都会でも自然エネを使ってエネルギーをつくっていこうという取り組みが進んでいる。

これからの持続可能な経済として、3つの地産地消が挙げられる。

1. 衣食住の地産地消・暮らしの物質循環 住：地元の木材、竹やその他地元資材による住居。奥多摩のほうで行われている。／食：地場の食材をフルに活用。／衣：ほぼ不可能だが、一部地域によっては可能。東北の被災地ではオーガニックコットンをつくらうという動きがある。
2. エネルギーの地産地消・農産物と同様、地域の個性がある 太陽エネルギー／風力エネルギー／小水力／地熱エネルギー／バイオマスエネルギー
3. おカネの地産地消・循環のための資金も地域で 地域の特産・個性・気候風土・暮らしの循環を資金からバックアップ／既存通貨・経済システムを使った仕組み(融資や投資を通じて)／補完貨幣・地域通貨による循環の仕組み (おわり)

連光寺6丁目湿地のホタル 今年もキャッチ

東京都による買収の話が進んでいる連光寺6丁目湿地のヘイケボタルが、今年も田中千尋さんによって捉えられた。田中さんは1回目は8月6日に行ったものの、月の光が明るく、ヘイケの放つ光は弱いため、写真撮影はうまくいかなかった。だが、8月15日の2回目は月光がなく撮影に成功した。(上下の写真2点)

ホタルの数は1、2回目とも15頭から20頭ほどだったという。まだまだこの地の自然が守られ、ホタルの生息環境に大きな変化はないらしい。

また、連光寺ホタル連絡会の観賞会に先立ち、7月の末に湿地の通路などの整備を4人で行ったが、現場が宅地開発業者に買収されて以来、ボランティアたちが全然立入ってなかったため、あちこちで草がひどく繁茂し、以前たんぼをつくっていたところへも行けなかったという。

